



Vol.8 No.1  
 発行人 井上 順孝  
 編集人 齊藤 智朗  
 〒150-8440 東京都渋谷区東  
 4丁目10番28号  
 電話 (03) 5466-0104  
 FAX (03) 5466-9237

## 日本文化研究所 平成二十六年事業計画① デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開

井上 順孝

本プロジェクトは、平成二十五〜二十七年度の三年計画で実施中のものであり、本年度はその二年目となる。事業内容は、これまで構築してきた研究開発推進機構全体が関わるデジタル・ミュージアム(DM)の運営、ならびに本プロジェクト独自の調査研究の展開とそれに基づくデジタル・コンテンツの拡充、という二つが柱である。それに加え、本プロジェクトでは、教育への活用・還元という観点を重視し、これをこの二つの柱の双方に適用しながら、事業を進めている。特に、独自のコンテンツ作成という点では、宗教文化に関する教育を充実させるための教材作成に注力している。

なお、本年度は、國學院大學博物館が中心となる、平成二十六年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業「東京・渋谷から日本文化を発信するミュージアム連携事業」が採択された。同事業の柱の一つには、「日本文化と宗教文化への理解を深めた人材を育成す

るミュージアム連携事業」があり、本プロジェクトのDMのコンテンツ活用ないし教材開発事業が中心的な役割を担っていくことが求められている。同支援事業は単年度の事業であるが、着手されたものは今後継続的に実施するという前提を大学当局及び本機構が有しているため、これとも緊密に連携を取りながら、本プロジェクト事業を遂行していく。

### 一、デジタル・ミュージアムの運営

平成二十一年より運用されているDMは、各種のデータベース・事典・ライブラリなどをオンラインで総合的に閲覧・利用できるものである。現在、公開されているデータベース類は二十五種である。

各機関の担当者による「デジタル・ミュージアムワーキンググループ」では継続的に意見交換と検討を行い、システムの充実などに努めてきた。今後の課題は、アクセスのしやすさ・利用しやすさの改善、

### 目次

◆ 日本文化研究所 平成二十六年事業計画① デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開 (井上順孝)	1
◆ 日本文化研究所 平成二十六年事業計画② 「國學院大學国学研究プラットフォーム」を拠点とする 国学の「古事記」解釈の研究 (遠藤潤)	3
◆ 学術資料センター 平成二十六年事業計画①②③ 大学ミュージアムにおける「学芸研究(考古学)」 「文化財研究」・「学芸情報」基盤の構築 (内川隆志・深澤太郎)	4
◆ 学術資料センター 平成二十六年事業計画④ 祭祀・祭礼の変遷に関する研究と関連資料の整理分析 (大東敬明)	5
◆ 校史・学術資産研究センター 平成二十六年事業計画① 國學院大學における古典学の展開に関する研究と公開 (齊藤智朗)	6
◆ 校史・学術資産研究センター 平成二十六年事業計画② 國學院大學における日本史学を中心とする学術資産研究の発展と公開 (齊藤智朗)	7
◆ 研究開発推進センター 平成二十六年事業計画① 研究開発推進センター研究事業 (宮本誓士)	8
◆ 研究開発推進センター 平成二十六年事業計画② 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 地域・渋谷から発信する共存社会の構築 (宮本誓士)	9
◆ 研究開発推進センター 平成二十六年事業計画③ 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 「古事記」の学際的・国際的研究 (渡邊卓)	10
◆ 國學院大學博物館 平成二十六年事業計画、文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業「東京・渋谷から日本文化を発信するミュージアム連携事業」	11
◆ 事業計画・人事一覧	12
◆ 彙報	14
◆ 資料紹介 立木貝塚採集の土偶	16

ならびに教育活動への活用であり、本年度もその点に集中的に取り組む。そのために、ワーキンググループのメンバーとソフト提供会社の担当者、機構事務課・広報課等との定期的な会議を開き、課題を共有して改善にあたる。

すでに、データベースの増加に対応して、トップ検索画面の改善を行ってきている。今後も初学者や外

国人利用者の利用を想定し、ポータルサイトの設営の検討やインターフェイスの改善を進める。

また、各機関の成果や刊行物、DMにスムーズにアクセスできるよう、本機構内各機関のウェブサイトを担当者と連携しながら、本機構サイトならびに機構内各機関のサイト構成の点検と整備を推進する。こうしたアクセスのしやすさの改

善と並行して、DMのコンテンツ拡充に努める。データベース追加・公開の要請には迅速に対応する。

コンテンツ開発・教材開発としては、特に動画素材の作成と活用や、スマートフォンアプリを活用したコンテンツ公開などが優先課題である。すでに平成二十五年度には様々な地図を表示するアプリ「ロケスマ」(デジタルアドバンテージ社)上で、DM内の「神道・神社史料データベース(現代)」をもとにして「全国神社マップ」が公開されている。こうした試みを踏まえつつ、また前述の文化庁支援事業とも連携しながら、DMコンテンツを実際の教育等の現場で広く活用できる形に編成していく。

## 二、プロジェクト独自の研究とデジタル・コンテンツの構築

### ① 教派神道・神道系新宗教の資料整理とデジタル化、公開の開始

本研究所には、これまで長く収集してきた、教派神道(神理教・神道修成派など)や神道系新宗教に関する文書資料が所蔵されている。すでにこれらのデジタル化を進めてきており、整理作業の多くが完了している。DMのなかには「教派神道関連資料データベース」が構築されており、公開体制が整備されている。

本年度はこのデータベースのコンテンツの充実に注力し、神理教関係資料・神道修成派関係資料・神道系教団資料の順に、メタデータの整備と資料分析とを並行させながらデータ公開を進め、利用者が活用可能な段階までの到達を目指す。

### ② 神道・日本文化関係論文の双方向翻訳(日本語文献の外国語訳ならびに外国語文献の日本語訳)

これまでのプロジェクト活動において、毎年三〜四本程度の神道ならびに日本文化に関する研究論文を選定して双方向で翻訳し、ウェブ上で公開・発信を進めてきた。すなわち日本語論文の外国語訳と、外国語論文の日本語訳である。平成二十五年度においても、英語論文の日本語訳二本、日本語論文の英訳一本を行った。これまでに翻訳された論文の蓄積はすでに三十本に及んでおり、DMのなかの「Articles in Translation 双方向論文翻訳」データベースからPDFファイルの閲覧とダウンロードができる。

本年度においてもこれまでと同様の事業を続ける。近年に刊行・発表された四本程度の論文類を、翻訳して発信する意義を鑑みて選定し、翻訳する。

また、これまで公開・発信されているものも含め、公開形式について見直しを行う。具体的には、大学リポジトリ等の形式を参照しながら、各ファイルに書誌情報・管理情報等を追加し、利用者・引用参照者にとっての利便性を考えながら改善を加えていく。

### ③ オンライン神道事典EOS(Encyclopedia of Shinto)の拡充

英文のオンライン神道事典であるEOSは、旧サイトの公開以来、世界中から合わせて五百万を超えるアクセスがあり、世界に広く知られ利

用されているコンテンツである。

すでに基本的な本文内容についても、その内容を逐次チェックし、統一性・整合性を確保して充実・改善をはかっていく基本作業は変わらず継続する。

EOS全章のイントロダクションと「第四部神社」の章について進めてきた韓国語訳は、「第八部流派・教団と人物」の翻訳と校閲を完了させている。公開時の文字表示の正確性を確認しながら、アップロードを行うとともに、すでに公開済みの内容のチェックを進める。

また、年表については、簡易版がアップロード済みであるが、二〇〇〇頁に及ぶ詳細版も翻訳・校閲が完了したため、形式を検討の上で公開を始め、利用に供したい。

以上をもって、EOSの基本的な内容の英訳はほぼ完了と言える。よって、こうした新しいコンテンツの公開開始、また旧サイトからの完全切り替えの誘導等について、広く知らせる方途について検討し、実施しなければならぬ。また、こうして構築されたEOSコンテンツならびに「Beginner's Pictorial Guide: Images of Shinto」等の内容を下敷きにした、日本及び海外の学生や初学者が学ぶのに適した日英二言語表示のコンテンツ構築を具現化していきたい。

## 三、教育への活用の重視

すでに順調に運営されているDMのコンテンツ、ならびに本プロジェクト独自のコンテンツを基盤に、どう教育の現場で利用可能な形で提供できるかというのが、本プロジェクト

の最重要課題である。

関連することとして、平成二十三年十一月以来、五回の認定試験により百四十名超の「宗教文化士」が誕生している。学術メディアセンターには、同資格制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」(CERC, サーク)が設置されており、本研究所ならびに本プロジェクトは協力を構築してきた。本年度も六月二十九日と十一月十六日に認定試験が予定されている。

また、本プロジェクト代表者の井上順孝を研究代表者とする科学研究費基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」は、本年度で四年目の最終年度となる。

これらのセンターならびに科研事業と連携し、特に教材開発を進めていく。具体的には、初学者向けの神道文化についての二言語教材の作成、動画教材の作成・収集・整理、宗教文化の学習に活用できる映画・世界遺産・博物館・参考文献などに関するデータベースの拡充、前述のスマートフォンプリを活用したコンテンツの公開などである。また、そのために必要な調査研究や研究会の開催を進める。

なお、プロジェクト内容と関連するテーマで毎年開催してきた国際研究フォーラムについては、本年度も秋に予定している。テーマは「ミュージアムで学ぶ宗教文化」とし、前述の文化庁支援事業の活動ともリンクさせつつ、各領域の専門家より発題がなされることとなっている。本DMのコンテンツの一層の充実と、教育への活用のあり方にも、大いに示唆が得られるものと期待される。

## 日本文化研究所 平成二十六年事業計画②

## 「國學院大學国学研究プラットフォーム」を

## 拠点とする国学の『古事記』解釈の研究

遠藤 潤

本研究事業は、日本文化研究所の二つの研究部門のうち、「神道・国学研究部門」の研究事業として行われるものである。

同部門では、平成二十五年度まで三か年にわたって「國學院大學国学研究プラットフォーム」の構築」研究事業を実施し、国学に関する基礎的研究を進めるとともに、学内でさまざまに行われている国学研究の連携のための組織づくりを進めてきた。今回、平成二十六年年度に実施する研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」は、この活動の展開として計画されたものであり、同時に全学的な取り組みである『古事記』の総合的な研究の一環として行われるものである。まず、後者について説明したい。

## 研究事業の背景と目的

本学では皇典講究所の創立以来、神道・日本文化の根幹に関わる古典についての研究が継続して行われてきた。『古事記』については、伝統的には国学の総合性のもと、河野省三、折口信夫、武田祐吉など文学や神道学をはじめとしてさまざまな分野からの研究がなされてきた。しかしながら、近年人文学の専門分化に伴って『古事記』研究も精緻化が進む一

方で、分野を越えた研究の全体像はやや見えにくくなっているといえる。

そのような状況のもと、國學院では文部科学省二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」および文部科学省選定オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」において、國學院における古典研究の今日的な評価と再検討を進めてきた。

平成二十四年十一月、國學院大學は「二十一世紀研究教育計画(第三次)」を発表したが、そのうち研究基盤整備に関する計画では「日本文化の国際的理解に向けた研究(国際日本学)の推進」が提起された。これにもとづき平成二十五年十月より二十一世紀研究教育計画委員会研究事業として「古事記」の学際的・国際的研究(研究代表者 武田秀章・谷口雅博)が開始された。詳細は当該の項目を参照していただきたい。

この研究事業では、『古事記』を焦点とし、これまで國學院で展開してきた『古事記』など古典についての研究成果をふまえて、今日の研究状況に即した多方面からの研究を行う。内容としては、I『古事記』の本文校訂・訓読・現代語訳とII『古事記』解釈史・研究史の研究からなる。Iについては、國學院の

古事記・日本書紀研究の蓄積を基礎として、今日の諸研究を本文に即した解釈の視点から再検討しつつ、それらをふまえた新しい解釈と現代語訳を提示する。IIについては、国史、歴史学、民俗学、神話学、考古学の人文諸学の観点から『古事記』の現代的理解についての検討を進める。このIIのうち、本研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」研究事業では、近世・近代の国学における『古事記』解釈・研究を遂行する。

## 研究事業の内容

## I 国学に関する基礎的研究

右で示したように、「古事記」の学際的・国際的研究」で構想されている研究の全体像のうち、ここでは、近世・近代の国学における『古事記』の解釈史の再検討を行う。実施にあたっては、対象となる時期を近世①(本居宣長以前)、近世②(本居宣長(幕末期国学者)、近代の三つに区分し、それぞれの時期について、『古事記』に関していかなる解釈や研究があったのか網羅的に調査を行い、文献リスト等を作成する。それとともに、主要な解釈・研究のうち、これまで注目されてこなかったものなどを対象として、その内容や特徴を検討し、研究会での報告や論文として発表する。

この活動は、日本文化研究所の専任教員、兼任教員、研究員が、研究開発推進センターの専任教員・兼任教員と連携しつつ行う。

## II 神道・国学に関する基礎的データの整理・公開

ここでは、研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築」をはじめとする研究開発推進機構日本文化研究所における神道・国学に関する基礎的データを整理するとともに、それらをデジタル・ミュージアム等において公開する。

なかでも右の研究事業で作成・整理した、平田篤胤の著書『靈能真柱』および『古史伝』等のデジタルデータは『古事記』や『日本書紀』の解釈にも深く関わるものであり、基礎的データとして活用範囲の広いものである。これらをデジタルの形態でウェブサイトに上で公開することによって、より多くの人の利用の便宜を図る。

## III 国学に関する研究連携のための組織づくり

すでに先行する研究事業で国学研究会の運営を行ってきたが、今回の研究事業では近世・近代の国学における『古事記』解釈の検討会を中心とし、従来よりも頻度を上げるよう努力する。また、学内(学部・大学院)の国学ないし『古事記』や上代文学関係の研究プロジェクトや研究者の参加を呼びかけ、異なるプロジェクト間での研究関係情報の共有を行う。

以上、概略ながら本研究事業の目的、背景、内容などについて説明したが、関係者一同、本学の『古事記』研究に資するべく、活動する所存である。

## 学術資料センター 平成二十六年事業計画①～③ 大学ミュージアムにおける「学芸研究(考古学)」・ 「学芸情報」・「文化財研究」基盤の整備

内川隆志・深澤太郎

### ①大学ミュージアムにおける

「学芸研究(考古学)」基盤の整備  
大学ミュージアムの主要な使命は、学生に対する「教育参考」活動、研究者に対する「研究発信」活動、及び一般に対する「大学開放」活動に集約される。これらの根幹は、大学ミュージアムが所管する一次資料化された学術資料群にほかならない。

顧みれば、昭和三(一九二八)年の考古学陳列室開館以来、当センターが収集してきた学術資料は、十萬点以上に及び、台帳登録件数も六〇〇〇件を超えた。従来の「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・研究・公開」の後継事業に位置付けられる本事業は、収蔵されている学術資料を改めて一次資料化し、収蔵品台帳・目録を再編集すると共に、その学術的価値を高めるために必要な調査・研究を実施する「学芸研究」機能を確立していくものである。

今年度の具体的な取り組みとしては、現行「台帳」に基づく資料確認、「台帳」未登録資料の全体像把握、考古収蔵庫内保管資料の地域・遺跡毎の収納完了を目指す。また、特定学術資料の調査・研究として、長野県須坂市石小屋洞窟遺跡出土資料や、館蔵の祭祀遺跡関連資料の整理、及び板碑集成データベースの構築など

を推進し、まとまった形で整理のついたものは随時研究報告等で発表してゆく予定である。

### ②大学ミュージアムにおける

「学芸情報」基盤の整備  
「近代学術資産資料化と地域連携活用に関する研究」の後継事業として位置付けられるプロジェクトで、旧日本文化研究所の学術フロントティア事業以来十年以上にわたって推進してきた事業である。最終目標としては学内外に広がる館蔵学術資産の総合アーカイブ化を目指す。

ミュージアム資料を、学内外の研究事業等に活用していく上で必要前提条件は、所管する資料の全貌を公にしておくことである。実際の考古資料・神道資料や、館蔵の学術資産を整理・保管・展示するだけでなく、それらのデジタル化された画像・情報を公開することによって、学内外からの利用要請に応じていくことが可能になる。学術フロントティア事業以来、大場資料・柴田資料等の公開・活用は軌道に乗り、公開実績も積み重ねてきた当事業では、かかる経緯と前提に立って、その後継として当センターの所管する学術資産を整理・デジタル画像化すると共に、併せて館蔵資料のデジタル情報化も推進していく。

今年度の具体的な取り組みとして

は、当センター所管の学術資産の全体像を把握するために、学術資産全体の「総合目録」を作成するとともに、学術資産の劣化対策と集中管理策を講じていく。

### ③大学ミュージアムにおける

#### 「文化財研究基盤」の整備

大学ミュージアムには、内外の研究機関等と連携して具体的な研究活動を広く推進していく「文化財研究」機能も欠くことができない。そこで、当センターでは、伝統文化リサーチセンターから引き継いだ祭祀遺跡データベース作成事業を基盤に、本学ならではの「祭祀考古学研究」拠点構築を目指していく。また、同じく伝統文化リサーチセンターで実施してきた領域横断的な地域文化研究(有形・無形文化財研究)を推進し、被災地を含む地域資産の保護・研究を進めていく「地域文化財研究」拠点を構想する。

今年度の具体的な取り組みとしては、「祭祀遺跡データベースの再構築」、「山岳・島嶼信仰と自然・人文環境の総合研究」、「奥州金華山の調査・研究」、そして外部機関からの受託事業を柱に、三つのサブプロジェクトを推進してゆく予定である。

#### (i)「祭祀考古学研究」

##### 拠点構築サブプロジェクト

祭祀遺跡データベースについては、旧伝統文化リサーチセンター考古学グループが構築に取り組んできたが、その後継事業については十分な配慮がなされていなかった。そこで当センターでは、このデータベースの継続整備を中核として、祭祀考

古学会等と協力しながら全国的な祭祀考古学研究ネットワークを構築し、網羅的かつ最新の当該学術情報にアクセスできる研究・教育拠点を作り上げていく。

#### (ii)「地域文化財研究」

##### 拠点構築サブプロジェクト

旧伝統文化リサーチセンターがその構築に取り組んできた、有形・無形文化財の学際的な研究事業を受け継ぎ、特定地域の総合調査と研究・教育を可能とする研究基盤を整備していく。テーマの必要性に応じた多様な研究ユニット、即ち学内・学外研究者(考古学・歴史学・民俗学・地理学・宗教学・環境学など)のハブとしての機能も期待されよう。具体的には、伊豆諸島や富士山に加え、陸奥金華山などの資料収集・調査研究を実施する。

#### (iii)「埋蔵文化財研究」

##### 拠点構築サブプロジェクト

考古学研究室と共同で文化財調査・整理・研究基盤を構築するものである。また、外部からの研究事業受託(特に本学が関与した遺跡の再調査事業等に限る)の受け皿を整備するものであり、若手研究者・学部学生、大学院生等による、極めて実践的な文化財研究実習の効果も期待される。具体的には、長野県須坂市八丁鎧塚古墳の調査研究、同市米子瀑布信仰悉皆調査を実施しており、今年度からの新規事業としては、調布市からの受託事業である国指定史跡下布田遺跡出土遺物の再整理を予定している。

## 学術資料センター 平成二十六年事業計画④ 祭祀・祭礼の変遷に関する研究と 関連資料の整理分析

大東 敬明

はじめに

本事業(祭祀・祭礼の変遷に関する研究と関連資料の整理分析)は平成二十三年度から平成二十五年まで実施した事業「神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析」(以下、「前事業」)を継承するものである。

前事業においては、木簡や鉄製・木製人形の復元などを行ない、古代の神道祭祀の復元を中核として研究を進めた。この際、神道祭祀を特色付ける行事である祓に注目した。

また、祭礼に関する研究では、平成二十三年度に企画展「神社祭礼絵巻―感じる雰囲気・考える現実―」を本学伝統文化リサーチセンター資料館(当時)において行い、年刊の『館報』一〇号においては特集「神社祭礼を描いた絵巻」を組んだ。平成二十五年には、大学所蔵典籍を学外で展示する「学びへの誘い・祭礼絵巻にみる日本のこころ」の企画立案に携わるとともに、会場において配布した小冊子の編集も行った。

このほか、神道史上の要点を学術資料センター(神道資料館部門)(以下、「本部門」)所蔵の関連資料により示した『資料で見る神社と神道の歴史 古代・中世を中心に』を刊行させたものである。さらに、同年度

には、國學院大學博物館で行なわれた企画展「伊勢の神宮とその周辺・昔の人々の思いを追う」。「神のあらわれ」の実施主体となった。これらにも前事業で進めてきた調査・研究の成果を反映させた。

本事業は、上記の成果をさらに発展させるために行う。

### 事業の目的

本事業は祭祀・祭礼に関連する歴史資料と現行の事例との双方に注目することで、古代から現代までを見据えた祭祀・祭礼の変遷について研究する。また、それに伴う関連資料の収集・整理をあわせて行う。

これは、本部門が有する神道資料の収集・整理作業を継続しながら、祭祀・祭礼に焦点を絞って研究し、それを展示、教育、新たな資料収集に反映させるためである。

本事業では、本部門が所蔵する諸資料を整理・分析した上で、学外諸機関所蔵資料も合わせて考察し、それと現行の祭祀・祭礼や芸能等と比較する。これにより祭祀・祭礼の変遷や全国各地への伝播の過程を明らかにする。これを第一の目的に据える。

祭祀は、神道を理解する上で、重要な要素であるが、制度・思想の研究に比して、その研究は遅れている

と言わざるをえない。祭祀に関しては、近年、歴史学、民俗学、美術史など、学問領域を超えて、研究が進められている。しかし、その研究成果が、本学で培われてきた神道史と関連付けられているとは言いがたい。

上記の研究を、國學院大學博物館及びウェブ上で本部門所蔵資料の公開を見据えて展開することにより、具体的な資料を通して、神道、特に祭祀・祭礼に関する情報を提供することができると期待する。よって、本事業は、研究成果や、研究に用いた資料の積極的な公開を、第二の目的に据える。

### 事業の概要

本事業の研究対象は、主として古代以降の祭祀・祭礼とする。

研究を進めるにあたっては、概念や理論にとらわれることなく、資料を分析することを通して見出せる祭祀・祭礼の実態を明らかにしたい。

このために、祭祀・祭礼に関わる文字資料、祭具、装束、奉献品、美術、工芸などを整理・分析する。この上で現行の祭祀・祭礼と比較しつつ、再検討を行い、祭祀・祭礼の変遷の過程を追う。

さらに、これを補完する業務として、祭祀・祭礼が行われた場などに関する研究も行う。特に、遺跡等に見られる祭祀の場や、二十一世紀COEプログラム及び研究開発推進機構の事業で対象とした社寺に重点を置き、実地調査を行い、つつ研究する。状況に応じて、関連資料の収集整理

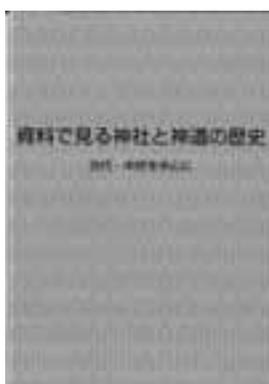
を図る。

具体的には、上記の視座のもと、前事業ですすめた古代の神道祭祀の復元をさらにすすめるとともに、本部門が所蔵する旧岡田本『年中行事絵巻』祇園御霊会をはじめとする祭祀・祭礼に関わる学内所蔵資料の再検討を行う。

この中から、変遷の背景にある制度・文化を明らかにする。さらに、この研究によって得られた成果を、國學院大學博物館等での展示計画の立案や、神道文化学部等の教育に資するため提供する。

### その他の活動

本年度は平成二十六年文化庁「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」に採択された「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」に関わって、富士信仰に関する特別展や展示キャプションの多言語化などにも関与する予定である。



『資料で見る神社と神道の歴史  
古代・中世を中心に』

## 校史・学術資産研究センター 平成二十六年事業計画① 國學院大學における古典学の展開に関する研究と公開

齊藤 智朗

### 事業の目的

本事業は、本学の学問史のうち、殊に古典研究史に関わる研究を行い、その成果を本学博物館（以下、博物館）での展示や簡易なブックレットの作成などを通じて教育等に還元することを目的とするものである。

具体的には、校史資料の収集・保存や、博物館における展示作業、自校史教育用サブテキストの作成・改訂作業といった、従来の業務を継続するとともに、平成十九年度より二十三年度まで本学が推進した文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」における「國學院の学術資産に見るモノと心」研究プロジェクトの研究活動を継承・発展させて、本学における古典学の展開に関する研究を行っていく。その研究成果は、博物館における校史関連展示での公開や、新たに作成するブックレット等を通じて学外へ発信するほか、学内の教育活動において活用していく。

なお、本事業の実施期間は、本年度（平成二十六年度）から二十八年までの三ヶ年度となる。

### 前年度の成果と本年度の計画

ここでは、前年度（平成二十五年

度）まで推進した「國學院大學における大学アーカイヴズと自校史教育の構築と展開」研究事業における成果を示しつつ、本年度の計画について説明する。

#### I 自校史教育

自校史教育関連として、教養総合「神道と文化」における「國學院大學の歴史」で使用されている、本センター編集による自校史教育用サブテキスト『國學院大學の二三〇年』（教育開発推進機構共通教育センター発行）のアンケートを、例年どおり関係機関・部署と共同で実施した。前年度は、計二、一一五通（前期一、二七八通、後期八三七通）のアンケート用紙を回収して集計を行うとともに、平成二十一年度のサブテキストの使用開始以降、これまで実施してきた当該テキストに関する集計結果の検討・分析をまとめた仮報告書を作成した。

殊に、本学の建学の精神への理解度において、平成二十一年度から二十三年度まで使用したサブテキスト『建学の精神と國學院大學の歩み―渋谷移転まで―』では、全体で約七割の学生が「理解できた」と回答していたが、平成二十四年度以降の現行のサブテキストにおいては、「理解できた」と回答した学生の比率が平均して九〇％近くに増加してお

り、建学の精神に関する理解をひろめる上で、本サブテキストが一定程度の役割を果たしているものと考えられる。

そこで本事業では、本学の学問史に関するブックレット等を作成し、従来のサブテキストとあわせて、本学の学問史を通じた建学の精神や歴史に関する理解をさらに深めることを目指していく。本年度は、その最初の段階として、本学の古典研究史に関する研究会を定期的に開催し、その成果を博物館での特別列品や簡易版リーフレットの作成・配布を通じて公開する。

#### II 校史資料の展示

國學院大學博物館における展示作業では、有栖川宮コレクションを中心に常設展の一層の充実をはかり、前年度初めの四月六日から五月十九日まで企画展「國學院大學の学問と歴史」を開催して、二回のギャラリートークを実施した。本年度も自校史関連の企画展等を開催していく。

#### III 研究業績

本事業における教員・研究員による研究成果として、本センターの機関誌である『國學院大學校史・学術資産研究』第六号（平成二十六年三月刊）に、宮部香織「小中村清矩の『令義解』講義録」、武田幸也「明治後期における神宮奉斎会と皇典講究所―「祭祀」と「宗教」をめぐる―」、また『國學院大學研究開発推進機構紀要』第六号（平成二十六年三月刊）には、益井邦夫「黎明期の書道教育考」及び武田幸也「近代伊勢信仰研究の課題と展望」の、合計四

本の論文を発表した。本年度も本センターの機関誌をはじめ、本事業における研究成果を発表していく。

#### IV 『校史』

本学の歴史や所縁のある人物にまつわる記事等をまとめたパンフレット『校史』第二十四号（平成二十六年三月刊）を編集・刊行し、齊藤智朗「渋谷移転九十年」、古山悟由「昭和四十一年度八王子公開講座関係書類綴」から見えてくるもの」、益井邦夫「シェイクスピア作品を講じた池田菊苗講師」、宮部香織「小中村清矩の『令義解』講義筆記―岩崎春彦旧蔵―小中村清矩博士令義解講義―」、武田幸也「神宮奉斎会と皇典講究所・國學院」、高野裕基「河野省三の『神道要語集』編纂―歿後五十年の節目に―」及び「河野省三歌碑」の各小論を発表した。本年度も第二十五号を刊行する予定である。



『校史』第24号

校史・学術資産研究センター 平成二十六年度事業計画②  
**國學院大學における  
 日本史学を中心とする学術資産研究の発展と公開**

齊藤 智朗

事業の目的

本事業は、平成二十三年度から二十五年度にかけての「國學院大學における学術資産研究の発展と公開」研究事業の後継事業であり、本学図書館(以下、図書館)と協働して、貴重書をはじめとする図書館所蔵の学術資産を研究し、その成果を図書館ウェブサイト上におけるデジタルライブラリーで公開するとともに、中近世史書誌目録を編纂・刊行するものである。本事業を通じては、貴重書等の調査・研究を通じて、研究者等の典籍・史資料に関する見識・考察力を向上させること、また本学の学術資産に関する研究成果を公開・発信することにより、その学術的価値を学内外に広く周知させることを目指す。

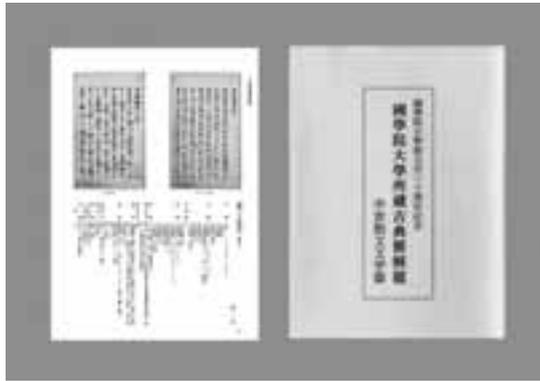
なお、本事業の実施期間は本年度(平成二十六年度)のみの単年度となる。

前年度の成果と本年度の計画  
 ここでは、本事業の先行事業である「國學院大學における学術資産研究の発展と公開」の最終年度にあたる前年度(平成二十五年)の成果を踏まえつつ、本年度の計画について説明する。

I 貴重書等に関する目録の編纂

本学創立百三十周年記念事業の一環として、本学所蔵の日本中世散文文学の古典籍を悉皆調査し、書誌解題をまとめた『國學院大學所蔵古典籍解題 中世散文文学篇』を刊行した。本書は、図書館所蔵の貴重書、一般書のみならず、梧桐文庫や武田文庫などの特殊文庫、日本文学資料室の収蔵資料までを横断的に取り上げたものであり、その数は約三百点にのぼる。これらの資料を歴史文学、関連、軍記物語関連、説話文学関連、鴨長明関連、卜部兼好関連、日記・紀行文学関連、芸能関連、室町時代物語・絵巻関連の八種に大別し、資料一点につき二、四コマの写真画像を掲載し、詳細な書誌情報を付している。

本年度は、日本史学関係として、中近世史書誌目録の編纂作業をすすめ、本年度末に刊行する。



『國學院大學所蔵古典籍解題 中世散文文学篇』  
 ((左)解題部分 (右)表紙)

【補充】

カテゴリー	書名	図書番号
9. 物語文学・日記文学・随筆文学	住吉物語	貴201-202
9. 物語文学・日記文学・随筆文学	源氏物語抄	貴800-819
9. 物語文学・日記文学・随筆文学	住吉物語	貴900-901
9. 物語文学・日記文学・随筆文学	河海抄	貴II-13
12. 史学・法制関係	神皇正統記	貴77-79
12. 史学・法制関係	開見録	貴3377-3380
19. 甘露堂文庫旧蔵資料(伊藤孝一氏旧蔵)	月々のあそび	甘露堂文庫091.8 / Ka / 385

【追加】

カテゴリー	書名	図書番号
2. 奈良絵本・絵巻物関係	稲荷妻の草子	貴1173
2. 奈良絵本・絵巻物関係	義経奥州落絵詞	貴1321-1325
9. 物語文学・日記文学・随筆文学	勢語七考	貴4241
10. 平家物語	平家物語 元和九年版	貴4342-4353
17. 古文書・古筆切関係	清原宣賢書状	貴1079
17. 古文書・古筆切関係	三条西実隆書状	貴1080
17. 古文書・古筆切関係	京極政経書状	貴1694
17. 古文書・古筆切関係	木沢長政書状	貴3600
17. 古文書・古筆切関係	吉川元春書状	貴4362

平成25年度デジタルライブラリー解説  
 補充分・追加分一覧

II デジタルライブラリー解題作成  
 デジタルライブラリー解題作成においては、すでに掲載されている資料に解説を付す「補充」と、学術的価値の高い資料を新たに掲載する「追加」の二種の作業がある。

前年度は、主に日本文学及び日本史学関連の典籍・史資料の充実を図り、本センター元研究員や日本文学専攻の大学院生の助力・協力も得て、「補充」作業が七点、「追加」作業が九点の、計十六点の資料に関する解説等を公開した(別表参照)。このデジタルライブラリー解題作成作業は、本年度も引き続き行っていく。

III 研究業績  
 本学の学術資産に関する研究成果として、本センターの機関誌である『國學院大學校史・学術資産研究』第六号(平成二十六年三月刊)に、針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『咸陽宮』の解題と翻刻」伊藤慎吾「國學院大學図書館所蔵『賀茂社記』」、遠藤珠紀・金子拓「國學院大學図書館所蔵『諸奉行』」、堀越祐一「國學院大學図書館所蔵『浅野家伝記』について」、高見澤美紀「國學院大學図書館所蔵 勝海舟旧蔵『二條大坂御城之記』」解題と翻刻―、笹川勲「國學院大學図書館所蔵『伊勢物語』関係資料書誌・略解題」の六本の資料翻刻・資料紹介を発表した。本年度も、本事業における研究活動を通じて得た新たな知見を、本センターの機関誌等で発表していく。

また、前年度は、本学の学術資産に関する研究会として「校史・学術資産研究センター研究会」を、本センター研究員のほか、大学院生等も参加して、二回開催した。本年度も継続して開催していく予定である。

## 研究開発推進センター 平成二十六年事業計画① 研究開発推進センター研究事業

宮本 誉士

### 事業の目的

本事業は、二十一世紀研究教育計画委員会策定による二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」における研究事業を継承し、建学の精神である神道・日本文化の研究をさらに発展させることを目的として、以下の各項目について進めるものである。

- (ア) 神道・日本文化に関する研究について、学内学術資産を活用しつつ推進する。
- (イ) 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業の研究マネジメントを行い、関係研究者と連携しつつ、円滑な事業運営を図る。
- (ウ) 神社界等からの外部資金の導入によって、研究プロジェクトを企画し実施する。
- (エ) 国内外の神道及びその関連領域の研究者・研究機関との連携関係を強化する。

### 事業の特色

本事業の学術的な特色は、これまで本学で培ってきた国学的研究、すなわち精緻な文献等資料の考証に裏打ちされた総合的日本文化学を目指すところにある。特に本センターがこれまで実施してきた、学内所蔵の関連資料を中核とした神社研究、神仏関係研究、「招魂と慰霊の系譜に

関する基礎的研究」、国学関連人物データベースの作成、などの成果をふまえながら、神道・国学と社会との関係を可能な限り多角的・実証的に把握することを目的として、本事業に携わる研究者個々の専門的見地から研究を進める。

研究体制としては、本センター専任教員が研究をマネジメントし、兼任教員・外部研究者と協力して研究活動を展開する。具体的には、定期的な研究会を開催することで、当該研究に関わる研究者間の議論を深化させるとともに、それぞれの進捗状況を確認し、全体の推進をはかる。また、各研究者それぞれの視点から吟味した資料を系統的に蒐集して、将来的には本学の学術資産とする。

### 平成二十六年研究事業計画

本年度は、先述した(ア)～(エ)の各項目に基づき、所期の目的を達成するため、以下の研究活動を実施する。

#### (一) 「昭和前期における神道・国学と社会」研究

当該テーマに関わる学内外の文献資料の調査蒐集、目録作成(『國學院雑誌』総目録・昭和前期編など)、それらを用いての具体的な精査及び分析を視野に入れて、昭和前期における神道・国学と社会の関係を考究す

る。成果公開に関しては、『研究開発推進センター研究紀要』等に学術論文として公表し、平成二十七年以降、当該研究の成果を纏めた一般書籍を出版する予定である。なお、本研究の経費は、院友神職会の指定寄附金による。

#### (二) 神道・国学に関する学内資料の調査・研究

図書館、各学部、研究開発推進機構および機構各機関が所蔵する神道・国学に関する資料について、本センター専任教員・兼任教員を中心として、各研究活動に関わる資料を蒐集し、調査・研究をおこなう。

#### (三) 北海道神宮の研究

北海道神宮の指定寄附金によって、本センター専任教員がマネジメントして推進する本研究は、その成果として、『北海道神宮論叢(仮)』を刊行することを目的とする。平成二十四年度・二十五年度は、北海道神宮、北海道立図書館、北海道立文書館、北海道大学附属図書館などの各機関が所蔵する関係資料を調査蒐集し、研究会を開催したうえで、『研究開発推進センター研究紀要』に学術論文を掲載した。本年度は、本研究に携わる研究者個々の成果について、執筆者会議及び研究会における検討のうえ、平成二十六年十月五日、北海道神宮において斎行される明治天皇御増祀五十年式年大祭の記念事業として『北海道神宮論叢(仮)』を編集・刊行する。刊行費は北海道神宮が負担する。

#### (四) 神道・日本文化研究の国際比較と国内外の研究者間の連携強化

成果公開に関しては、『研究開発推進センター研究紀要』等に学術論文として公表し、平成二十七年以降、当該研究の成果を纏めた一般書籍を出版する予定である。なお、本研究の経費は、院友神職会の指定寄附金による。

神道・日本文化研究を対象として、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所、明治神宮国際神道文化研究所など、神社界および国内外の関連研究機関との連携、研究交流推進の企画・立案をおこなう。

#### (五) 研究開発推進センター研究会

本センターの関連事業、研究事業を中心に、本センターの構成員を核として、研究開発推進機構構成員や学部教員、さらに関心をもつ研究者一般の参加を募りながら議論をおこなう。本年度は、年七回の実施を予定している。

#### (六) 『研究開発推進センター研究紀要』の刊行

本センターの研究成果を発表するため、『研究開発推進センター研究紀要』第九号を刊行する。なお、刊行費は、院友神職会の指定寄附金による。



『國學院大學研究開発推進センター 研究紀要』第8号

## 研究開発推進センター 平成二十六年事業計画② 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 地域・渋谷から発信する共存社会の構築

宮本 誉士

### 事業の目的

本事業は、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業として、研究開発推進センターのマネジメントにより推進されてきた「渋谷学」「共存学」両プロジェクトを統合して推進される、学部横断型の学際研究事業である。本事業は、本学の「建学の精神」を具現化するために、「共存社会の構築」という目標を掲げ、本学の特色を活かした研究を進めると同時に、これによる地域貢献・社会還元の内を在り方を追求する。

### 事業の概要

本学の所在地である「渋谷」を研究拠点とする本事業は、多様な社会の局面において観察される「共存」の様態を探りながら、持続的発展を可能とする社会モデルの構築を目的として、次の四つの研究領域を設定する。

- I 渋谷：渋谷を中心とした東京の都市形成史と都市的現実についての研究
- II 地域：地域社会の共同性・拠点・持続可能性に関する研究
- III 日本：日本の伝統文化や社会政策における「共存」の知恵の可能性と限界の研究
- IV グローバル化する世界：地球規模での共存社会の可能性について

### 右の四領域のうち、「領域Ⅰ」と「領域Ⅱ」の一部を渋谷学プロジェクト、「領域Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」を共存学プロジェクトがそれぞれ担当する。

本事業においては、これら領域における幾つかの事例調査を進めると同時に、人間と人間、人間と環境、歴史・伝統と現代、都市と地域などの様々な関係性における、協調・共生・共存・葛藤・対立などの多様な性質について、各学部から参加する専任教員を中心とする各研究者の専門分野から把握していく。

そして、「共存社会の構築」という視点から、これまでの本学における研究蓄積と本事業における研究成果を集約し、再検討することで、持続可能な共存社会モデルを抽出・検討し、学術による地域貢献・社会還元を追求する。

### 平成二十六年研究事業計画

平成二十三年度に単年度の研究事業として出発した本事業は、平成二十四年度からの三年間の研究計画として策定され、本年度が最終年度となる。本年度の活動としては、これまでの各領域における研究成果を集約すると同時に、具体的な地域を対象とした継続的な調査・研究活動を実施する。

また、以上の活動をふまえて、領域横断的・学際的な観点による「共存社会」のモデルを抽出・検討する。これらの成果については、刊行物、公開研究会・総合講座などの開催により、教育・社会に還元する。また、本事業を通じて、自らの専門分野を軸としつつ、学際的視野を有する若手研究者の育成を図る。

各領域の研究調査計画は次のとおりである。

#### I 渋谷

研究領域Ⅰにおいては、渋谷の再開発を一つの焦点として、渋谷の歴史と現状の記録化を目的とする。渋谷区商店街関係者からの聞き取り調査を実施する。また、これまでの「渋谷学」の成果に基づきながら、渋谷を中心とした東京の都市形成史と都市的現実を焦点として、「共存社会」の観点からの研究をおこなう。

研究成果の公開については、現代の渋谷をテーマとして編集する『渋谷学叢書4』、渋谷地下街を焦点とした『渋谷聞きがたり2』、「都市の語りとハナシ」をテーマとする『都市民俗研究 第二十号』をそれぞれ編集・刊行するほか、総合講座「渋谷学」(平成二十六年後期授業)、渋谷学研究会を実施する。

#### II 地域(農山漁村)

研究領域Ⅱにおいては、東日本大震災以降、被災地における地域コミュニティの復興と伝統文化、特に神社、伝統芸能の果たす役割などに着目し、岩手県を中心とするフィールド調査を継続的に実施している。これらの成果公開については、既に

共存学フォーラム「震災復興と文化・自然・人のつながり―岩手三陸・大槌の取り組みから―」(平成二十五年二月十七日開催)をはじめとする公開研究会、「共存学叢書」などの刊行物における成果公開をおこなっており、本年度も継続して調査及び研究成果の公開を実施する。

#### III 日本

研究領域Ⅲにおいては、領域Ⅱと関連しながら、本学における神道・日本研究の蓄積に立脚し、日本の伝統文化や社会政策における「共存」の知恵の可能性と限界を問うことを目的として、公開研究会、「共存学叢書」などにおける成果公開を実施してきたが、本年度も引続き、研究調査、成果の公開をおこなう。

#### IV グローバル化する世界

研究領域Ⅳにおいては、グローバル化する世界を対象として、政治・経済・宗教などの様々な観点から、地球規模での多様な共存社会の可能性を探ることを目的として、公開研究会、「共存学叢書」などにおいて成果公開を実施しており、本年度も引続き、研究調査、成果の公開をおこなう。

以上、領域Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの成果公開を目的として、本年度は、『共存学叢書3』を刊行し、共存学公開研究会を開催する予定である。

## 研究開発推進センター 平成二十六年事業計画③ 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 『古事記』の学際的・国際的研究

渡邊 卓

### 事業の目的

本事業は、二十一世紀研究教育計画(第三次)で提起された、「日本文化の国際的理解に向けた研究(国際日本学)の推進」を具現化する研究事業であり、日本文化の根本を理解する鍵となる『古事記』について、学際的・国際的な視点から理解しようとするものである。

國學院大學では皇典講究所の創立以来、神道・日本文化の根幹に関わる古典についての研究が継続して行われてきており、なかでも『古事記』については、伝統的には国学の総合性のもと、河野省三、折口信夫、武田祐吉など文学や神道学をはじめとしてさまざまな分野からの研究がなされてきた。しかしながら、近年、人文学の専門分化に伴って『古事記』研究も精緻化が進む一方で、分野を越えた研究の全体像はやや見えにくくなっているといえる。そこで本事業では、これまで國學院で展開してきた『古事記』など古典についての研究成果をふまえて、今日の研究状況に即した多方面からの研究を行うことを目的とする。

本事業は、グループⅠ『古事記』の本文校訂・訓読・現代語訳とグループⅡ『古事記』解釈史・研究史の研究からなり、Ⅱは(1)近世前・中期、(2)近世後期、(3)近代、(4)

神話学・民俗学・人類学、(5)戦後歴史学における令制以前研究の計六つの班に分かれて研究活動を行う。

グループⅠについては、國學院の『古事記』『日本書紀』研究の蓄積を基礎として、今日の諸研究を本文に即した解釈の視点から再検討しつつ、新たな解釈と現代語訳を提示する。

グループⅡについては、国学史、歴史学、民俗学、神話学、考古学の人文学の観点から『古事記』の現代的理解についての検討を進める。國學院の歴史学ではすでにCOEにおいて(東アジアのなかの古代日本)という視点にもとづく研究が遂行さされたが、ここでもこれに立脚しつつ『古事記』と古代日本社会の関係について考察する。また、文学・民俗学においても東アジアとの比較という視点を重視し、さらに、海外における『古事記』研究の歴史と現状を調査するとともに、海外の神話・説話との比較検討を行い、その基底にある文化の共通性と異質性を把握し、このことよって世界の中の『古事記』の位置や価値を考える。前近代において、『古事記』の研究・解釈を主として進めてきたのはいうまでもなく国学者たちであるが、国学による『古事記』解釈史については研究開発推進機構日本文化研究所「國

學院大學 国学研究プラットフォーム」を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」を進めるとともに、関係の研究者がこれと連携・協働する。これらの研究を通して得た『古事記』研究の成果を論集にまとめて刊行し、世界に開かれた「古事記」学構築を目指す。

### 平成二十六年度の計画

先述した目的を達成するために、第一に『古事記』の注釈を作成する。グループⅠによる『古事記』本文校訂・訓読・現代語訳に即して、グループⅡ各班による『古事記』の解釈史・研究史の研究が進められる。

これら各研究および関連研究の成果は、定例研究会において協議され共有化をはかる。そして、全体を取り纏めて『古事記』の注釈とする。なお本年度の注釈範囲は『古事記』上巻の冒頭から、黄泉国までである。その一方で、各グループの研究テーマに応じたデータベース・文献リストの作成を行う。これら注釈を含む研究成果は、論集に含め年度末に刊行予定である。

また、これら注釈作成のために、国内外における『古事記』研究の現状調査および研究交流を行うなど、各研究班ごとに『古事記』に関する資料調査・収集を行う。収集された資料は、各

研究班において分析・研究が行われ、価値の認められる資料については國學院大學博物館において、研究成果の一部として公開する(五月二十一日(二十八日)、「多言語化される『古事記』」として、外国人による『古事記』の翻訳本を展示)。

また成果公開の一環としては、外部の研究者を招いての講演会を本年度に開催する予定である。



國學院大學博物館 平成二十六年事業計画  
 文化庁 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業  
 「東京・渋谷から日本文化を発信するミュージアム連携事業」

加藤 里美

活動概要

平成二十六年度は、文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業「東京・渋谷から日本文化を発信するミュージアム連携事業」(以下、ミュージアム連携事業)が採択された。そのため本年は、従来計画されていた企画展、特別列品、ミュージアムトーク、ワークショップ、英語ガイドの育成の事業に加えて、同事業を実施する運びとなった。ミュージアム連携事業

当該事業では、渋谷区、東洋文庫、山種美術館と協力し、①国際都市「渋谷」におけるグローバルな集客活動の推進、②日本の有形・無形文化の効果的発信、③日本文化・宗教文化に対する理解のある地域的・国際的人



材育成の事業モデルを構築する、の三つの大きな柱を指標として、地域社会に根付いたシステムを構築し、歴史・宗教教育を通じた人材育成、日本文化を国内外への発信を行う。

具体的には、①は多言語による日本文化の普及と集客力向上に向けたミュージアム連携事業の実施、②は日本文化と宗教文化への理解を深めた人材を育成するミュージアム連携事業の実施、③は日本文化を体験・実感するミュージアム連携事業の実施、を展開する。

活動計画(ミュージアム連携事業には\*印)  
 ◇特別展

\*「富士山―その景観と信仰・芸術」(平成二十六年九月一日～十月十一日)、九月六日(土)／トークイベント「不二之山」―山伏の世界に身を投じた写真家、井賀孝が捉えた富士山―、九月十五日(月・祝)／講演会「富士山信仰と歴史・文学」、九月十五日(月・祝)／ミニ・コンサート「富士の山を聴く」、九月二十日(土)／ワークショップ「富士講の世界―渋谷の富士塚を歩く―」

◇企画展  
 「新収蔵資料展」(平成二十六年六月二日～二十八日)  
 「明治国学の展開と継承・発展―井上頼国歿後百年記念展」(平成二十六年七月五日～八月三十一日)、ミュージアムトーク(平成二十六年

七月五日・齊藤智朗准教授・高野裕基学芸員)

「学びへの誘い」(平成二十六年十月十八日～十一月八日)、講演会・ミュージアムトーク(平成二十六年十月十八日・堀越祐一)

「西洋古地図に見る日本(仮)」(平成二十六年十一月十五日～平成二十七年一月十六日)、ミュージアムトーク(日程・解説者調整中)

「災害と文化財―被災地域の再生にむけて―(仮)」(平成二十七年二月七日～三月三十一日)、ミュージアムトーク(日程・解説者調整中)

◇特別列品  
 「多言語化される古事記」(平成二十六年五月二十一日～五月二十八日)、ミュージアムトーク(平成二十六年五月二十四日・平藤喜久子准教授)

「祇園祭」(平成二十六年七月一日～七月三十一日)  
 ◇フォーラム

\*「美術文化フォーラム「水の景・水の音―日本美術と文化―」

平成二十六年八月三日・國學院大學百二十周年記念二号館一階二一〇一教室・主催・山種美術館・國學院大學

◇ミュージアムトーク(常設展)  
 「縄文土器の文様を読む」(平成二十六年五月十七日・石井匠学芸員)

「神と紙のはなし」(平成二十六年六月七日・吉永博彰PD研究員)

「経筒と瓦経」(平成二十六年六月二十一日・阿部常樹学芸員)

「茅の輪のはなし」(平成二十六年七月五日・斎藤しおり学芸員)

「玉作とまつり」(平成二十六年七月十九日・加藤里美学芸員)

「神道関連」(平成二十六年十月四日・老田理恵子学芸員)

「考古学関連」(平成二十六年十月十八日・浪形早季子学芸員)

「神道関連」(平成二十六年十一月一日・高野裕基学芸員)

「考古学関連」(平成二十六年十一月十五日・阿部常樹学芸員)

「神道関連」(平成二十六年十二月六日・小山田江津子学芸員)

「考古学関連」(平成二十六年十二月六日・石井匠学芸員)

「神道関連」(平成二十七年二月七日・高野裕基学芸員)

「考古学関連」(平成二十七年二月二十一日・浪形早季子学芸員)

「神道関連」(平成二十七年三月七日・老田理恵子学芸員)

◇ワークショップ  
 \*「祓の文化体験」(平成二十六年六月二十八日・協力・金玉八幡宮・共催・渋谷区)

\*「紙すき」(平成二十六年七月二十六日・二十七・共催・渋谷区)

\*「探検!ミュージアム」(平成二十六年七月三十日・共催・渋谷区)

\*「貝塚で知ろう貝の生態」(平成二十六年八月四日・共催・渋谷区)

\*「浮世絵版画摺り体験」(平成二十六年八月五日・協力・公益財団法人アダチ伝統木版画技術保存財団・山種美術館)

\*「勾玉づくり」(平成二十六年八月九日・十日・共催・渋谷区)

◇英語ガイドの育成  
 \*本学学生を中心とした学生八名を中心として博物館の英語による

シヨートツアーガイドの実施を目指す。また、ツアーの概要が固まり次第、地域住民からもツアーガイドを募り、地域に開かれた博物館としての活動を広げる計画である。

## 平成26年度 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧

平成26年6月1日現在

機関	研究事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	ポストドク研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員
日本文化研究所	デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開 (H25-H27)	平藤喜久子 星野靖二 塚田穂高 鈴木聡子	*井上順孝 齊藤こずゑ ヘイヴンズ, ノルマン 黒崎浩行	李 和珍 市川 収 フレール, チャールズ	加藤久子	天田顕徳	土屋 博 ナカイ, ケイト 星野英紀 山中 弘	市田雅崇 今井信治 ガイタニデイス, ヤニス カドー, イヴ キロス, イグナシオ 小堀馨子 野口生也 藤井麻央 村上 晶 山梨有希子
	「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究 (◎ H26)	塚田穂高	*遠藤 潤 松本久史		早乙女牧人 武田幸也	齋藤公太	林 淳	一戸 渉 小田真裕
学術資料センター	大学ミュージアムにおける「学芸研究（考古学）」基盤の整備 (◎ H26-28)	内川隆志 深澤太郎	*吉田恵二 青木 豊 小川直之 笹生 衛 谷口康浩 朝倉一貴	中村耕作			古谷 毅	阿部常樹 植田 真 粕谷 崇 加藤元康 大工原豊 中島将太 中村 大
	大学ミュージアムにおける「文化財研究」基盤の整備 (◎ H26 - H28)	内川隆志 深澤太郎	*吉田恵二 小川直之 笹生 衛 谷口康浩 黒崎浩行 朝倉一貴	石井 匠				栗木 崇 平本謙一郎
	大学ミュージアムにおける「学芸情報」基盤の整備 (◎ H26-H28)	内川隆志 深澤太郎	*小川直之 黒崎浩行 朝倉一貴			黒田迪子		石川岳彦 宇野淳子 齋藤しおり 田中秀典
	祭祀・祭礼の変遷に関する研究と関連資料の整理分析 (◎ H26 - H28)	大東敬明 鈴木聡子	*笹生 衛 岡田莊司 加瀬直弥		吉永博彰			
校史・学術資産研究センター	國學院大學における古典学の展開に関する研究と公開 (◎ H26 - H28)	齊藤智朗 渡邊 卓	*阪本是丸		武田幸也	高野裕基	益井邦夫	
	國學院大學における日本史学を中心とする学術資産研究の発展と公開 (◎ H26)	齊藤智朗 渡邊 卓	*阪本是丸 岡田莊司 千々和到 根岸茂夫 針本正行	高見澤美紀 堀越祐一	笹川 勲 山本岳史			遠藤珠紀 金子 拓
研究開発推進センター		齊藤智朗 宮本誉士 大東敬明 渡邊 卓 上西 亘	*阪本是丸 武田秀章 針本正行 遠藤 潤 太田直之 加瀬直弥 菅 浩二 中山 郁 藤田大誠 藤本頼生				赤澤史朗	今泉宜子 坂井久能 佐藤一伯 大丸真美 津田 勉 中野裕三 森 悟朗
	地域・渋谷から発信する共存社会の構築 (H24 - H26)	宮本誉士 上西 亘	*阪本是丸 上山和雄 古沢広祐 遠藤 潤 菅 浩二 藤田大誠 藤本頼生 松本久史		高久 舞	網谷哲成 杉内寛幸		赤澤加奈子 木村秀史 康 成文 重村光輝 筒井 裕 手塚雄太 西俣先子 野中規正 冬月 律
	『古事記』の学際的・国際的研究 (H25-H26)	宮本誉士 渡邊 卓 上西 亘	*武田秀章 遠藤 潤 谷口雅博 松本久史					
学芸員（専任）		加藤里美						
学芸員（嘱託）		阿部常樹 石井 匠 老田理恵子 小山田江津子 齋藤しおり 高野裕基 浪形早季子						

◎ 新規研究事業 \* 研究事業代表者

## 平成26年度 研究開発推進機構 人事一覧

平成26年6月1日現在

機構長	井上 順孝
日本文化研究所長	井上 順孝
学術資料センター長	吉田 恵二
校史・学術資産研究センター長	阪本 是丸
研究開発推進センター長	阪本 是丸
國學院大學博物館長	吉田 恵二
教授(兼担)	青木 豊 井上 順孝 上山 和雄 岡田 莊司 小川 直之 齊藤 こずゑ 阪本 是丸 笹生 衛 武田 秀章 谷口 康浩 千々和 到 根岸 茂夫 針本 正行 古沢 広祐 ヘイヴンズ, ノルマン 吉田 恵二
准教授(専任)	内川 隆志 齊藤 智朗 平藤 喜久子 星野 靖二 宮本 誉士
准教授(兼任)	遠藤 潤 太田 直之 加瀬 直弥 黒崎 浩行 菅 浩二 谷口 雅博 中山 郁 藤田 大誠 藤本 頼生 松本 久史
助教(専任)	大東 敬明 塚田 穂高 深澤 太郎 渡邊 卓
助教(特任)	上西 亘 鈴木 聡子
助手(兼担)	朝倉 一貴
客員研究員	李 和珍 石井 匠 市川 収 高見澤 美紀 中村 耕作 フレーレ, チャールズ 堀越 祐一
ポスドク研究員	加藤 久子 早乙女 牧人 笹川 勲 高久 舞 武田 幸也 山本 岳史 吉永 博彰
研究補助員	天田 顕徳 網谷 哲成 黒田 迪子 齋藤 公太 杉内 寛幸 高野 裕基
学芸員(専任)	加藤 里美
学芸員(嘱託)	阿部 常樹 石井 匠 老田 理恵子 小山田 江津子 齋藤 しおり 高野 裕基 浪形 早季子
客員教授	赤澤 史朗 土屋 博 ナカイ, ケイト 林 淳 古谷 毅 星野 英紀 益井 邦夫 山中 弘
共同研究員	赤澤 加奈子 阿部 常樹 石川 岳彦 市田 雅崇 一戸 渉 今井 信治 今泉 宜子 植田 真 宇野 淳子 遠藤 珠紀 小田 真裕 ガイタニデイス, ヤニス 粕谷 崇 カドー, イヴ 加藤 元康 金子 拓 木村 秀 史 キロス, イグナシオ 栗木 崇 康成文 小堀 馨子 齋藤 しおり 坂井 久能 佐藤 一伯 重村 光輝 大工原 豊 大丸 真美 田中 秀典 津田 勉 筒井 裕 手塚 雄太 中島 将太 中野 裕三 中村 大 西俣 先子 野口 生也 野中 規正 平本 謙一郎 藤井 麻央 冬月 律 村上 晶 森 悟朗 山梨 有希子

## 【事務局】

学術メディアセンター事務部次長(研究開発推進機構事務、情報システム担当)	及川 聡
学術メディアセンター事務部次長(図書館事務担当)	古山 悟由
学術メディアセンター事務部次長(情報システム担当)	堀内 弘行
研究開発推進機構事務課長	杉本 久男
研究開発推進機構事務課	小倉 健 小平 浩衣 須田 佳代 織田 泰輔 志水 志保 神山 幸子

# 彙報

## 会議

### ○全体

- ・平成二十五年度第四回人事委員会、平成二十六年一月八日(水) 十一時三十分～十一時四十九分、AMC会議室○六
- ・平成二十五年度第二回教員等資格審査委員会、平成二十六年一月九日(木) 十一時～十一時三十五分、AMC会議室○六
- ・平成二十五年度第四回運営委員会、平成二十六年一月十六日(木) 十五時五十二分～十六時六分、若木タワー会議室○五
- ・平成二十五年度第五回企画委員会、平成二十六年一月二十二日(水) 十一時～十一時四十分、AMC会議室○六
- ・平成二十五年度第五回人事委員会、平成二十六年二月十九日(水) 十二時十分～十二時二十四分、AMC会議室○六
- ・平成二十五年第三回教員等資格審査委員会、平成二十六年二月十九日(水) 十二時三十分～十二時三十七分、AMC会議室○六
- ・平成二十五年第五回運営委員会、平成二十六年二月十九日(水) 十八時二十分～十八時三十五分、若木タワー会議室○五
- ・平成二十五年第六回企画委員会、

- 平成二十六年三月十二日(水) 十一時～十一時五十七分、AMC会議室○六
- ・平成二十五年第六回人事委員会、平成二十六年三月十二日(水) 十一時五十八分～十二時八分、AMC会議室○六
- ・平成二十五年第六回運営委員会、平成二十六年三月十二日(水)、(持ち回り稟議)
- ・平成二十六年第一回企画委員会、平成二十六年四月十六日(水) 十一時～十一時五十五分、AMC会議室○六
- ・平成二十六年第一回人事委員会、平成二十六年五月七日(水) 十時四十分～十時五十五分、AMC会議室○六
- ・平成二十六年第一回教員等資格審査委員会、平成二十六年五月七日(水) 十一時五分～十一時十八分、AMC会議室○六
- ・平成二十六年第一回運営委員会、平成二十六年五月八日(木) 十五時四十五分～十六時三十分、若木タワー会議室○五
- 日本文化研究所
  - ・平成二十五年第五回所員会議、平成二十六年一月十五日(水) 十一時～十一時五十分、AMC会議室○六
  - ・平成二十六年第一回所員会議、平成二十六年四月九日(水) 十一時一分～十二時五分、AMC会議室○六
- 学術資料センター
  - ・平成二十五年第四回学術資料センター会議、平成二十六年一月八日(水) 十一時～十一時三十分、AMCプロジェクトルーム二
  - ・平成二十六年第一回学術資料センター会議、平成二十六年四月九日

- (水) 十五時二分～十五時三十五分、AMCプロジェクトルーム二
- 公開講座 講演会・シンポジウム・関連学会
  - 日本文化研究所
    - ・公開学術研究会集「國學院大學の国学研究の現在」、平成二十六年二月八日(土) 十三時～十六時、AMC会議室○六
    - ・国際研究フォーラム「日常生活と宗教文化・戒律をめぐる問題を中心に」、平成二十六年二月十二日(木) 十三時～十七時三十分、AMC会議室○六、基調講演 = Julia Iprave (英国、ワーヴィック大学)、発題 = Jain Ankita (東京大学)、Noda Dorit、Gureshi Haroon、コメンテーター = 小田淑子(関西大学)、司会 = 井上順孝(國學院大學)、共催 = 科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」
  - 学術資料センター
    - ・体験学習講座「勾玉づくり」(共催、主催 = 白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、平成二十五年八月十日(土) 十三時～十六時、八月十一日(日) 十三時～十六時、白根記念渋谷区郷土博物館・文学館)
    - ・大学博物館共同企画公開講演会(共催 = 西南学院大学博物館、平成二十五年十二月七日(土) 十四時～十六時、西南学院大学、講演 = 安高啓明(西南学院大学)「日本宗教の源流とキリスト教」、深澤太郎(國學院大學)「神道の成立と外来文化」
    - ・大学博物館共同企画公開講演会(共

- 催 = 西南学院大学博物館、平成二十六年一月二十五日(土) 十三時三十分～十五時、AMC常磐松ホール、講演 = 安高啓明(西南学院大学)「日本宗教のなかのキリスト教 - 伝来から近代教育まで - 」
- 研究開発推進センター
  - ・平成二十五年第三回「共存学」公開研究会「大学での地域連携・地域支援をどう進めていくか?」、平成二十六年三月十五日(土) 十三時三十分～十六時三十分、AMC会議室○六、報告者 = 吉田敏弘(國學院大學)、井上直人(株)オーブンブツク、本学OB「地域調査と地域支援の間 - 岩手県南地方の事例から - 」、コメンテーター = 茂木栄(國學院大學)、黒崎浩行(國學院大學)
  - ・「宗教と社会」学会研究プロジェクト「戦争死者慰霊の関与と継承」研究会(共催 = 研究開発推進センター)、平成二十六年三月十六日(日) 十四時～十七時四十分、AMC会議室○六、報告者 = 鈴木卓(米デニソン大学)「記憶創りの旅路 - 民間人引揚者と戦死者遺児にとつての北マリアナ諸島」、西村明(東京大学)「戦地慰霊・遺骨収集をめぐるパフォーマティヴ・メモリー」、コメント = 中山郁(國學院大學)、司会 = 粟津賢太(南山大学)

## 出張

- 日本文化研究所
  - ・平藤喜久子、「中国地方・京都の社寺」の調査のため、平成二十六年二月

十四日(金)～二月十五日(土)、山口県山口市・防府市、京都府京都市・鈴木聡子、「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」の調査のため、平成二十六年二月二十四日(月)～二月二十六日(水)、京都府京都市・宇治市

・平藤喜久子、「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」のため、平成二十六年二月二十七日(木)～三月一日(土)、岩手県遠野市・宮古市・山田町

・遠藤潤・武田幸也、「鹿児島県の調査資料」のため、平成二十六年三月十二日(水)～三月十四日(金)、鹿児島県鹿児島市

・井上順孝、「教派神道及び神道系新宗教の教団資料の収集と面談調査」のため、平成二十六年三月十六日(日)～三月十八日(火)、福岡県北九州市・筑紫野市・久留米市、熊本県玉名郡長洲町

・平藤喜久子、「宮城県・山形県の社寺調査」のため、平成二十六年三月二十七日(木)～三月二十九日(土)、宮城県仙台市、山形県山形市

○学術資料センター

・深澤太郎・北澤宏明・浅海莉絵・鈴木志穂・吉澤花織、「須坂市委託事業」八丁鎧塚古墳調査研究業務委託(国史跡指定事業)の調査のため、平成二十六年二月二十四日(月)～二月二十六日(水)、長野県須坂市

・齊藤しおり、「絵葉書資料」の調査のため、平成二十六年二月二十六日(水)～三月二日(日)、広島県広島市・福山市・甘日市市

・内川隆志・深澤太郎・石井匠、齋藤しおり、宇野淳子・大日方一郎・北澤宏明・小松崎百恵、「金華山信仰



関連調査の補完調査」のため、平成二十六年三月十五日(土)～三月十六日(日)、宮城県石巻市・女川町

○研究開発推進センター

・古沢広祐・茂木栄・ノルマン・ヘイヴンズ・筒井裕、「岩手県大槌町における東日本大震災からの地域復興に関する現地調査」のため、平成二十六年二月八日(土)～二月十日(月)、岩手県大槌町

・宮本誉士・渡邊卓・上西亘、「北海道神宮に関する資料調査」のため、平成二十六年三月二日(日)～三月四日(火)、北海道札幌市

刊行物

※機関誌の目次等、詳細につきましてはホームページをご参照下さい。

○全体

・研究開発推進機構『國學院大學研究開発推進機構紀要』第六号(平成二十六年三月三十一日発行)

○学術資料センター

・学術資料センター(神道資料館部門)『資料で見る神社と神道の歴史 古代・中世を中心に』(平成二十六年二月二十八日発行)

・学術資料センター(考古学資料館部門)『島々の聖地 伊豆大島編』(平成二十六年二月二十八日発行)

・学術資料センター(考古学資料館部門)『学術資料センタープロジェクト研究報告 人文科学と画像資料研究』第七集(平成二十六年二月二十八日発行)

・学術資料センター(考古学資料館部門)『学術資料センター絵葉書資料目録(青森・岩手・宮城・福島)宮地直



一旧蔵資料・神道資料館所蔵資料』(平成二十六年二月二十八日発行)

・学術資料センター(考古学資料館部門)『國學院大學学術資料センター研究報告』第三十輯(平成二十六年三月三十一日発行)

○校史・学術資産研究センター

・校史・学術資産研究センター『國學院大學創立百三十周年記念 國學院大學所蔵古典籍解題 中世散文文学篇』(平成二十六年二月二十八日発行)

・校史・学術資産研究センター『國學院大學 校史・学術資産研究』第六号(平成二十六年三月七日発行)

・校史・学術資産研究センター『校史』第二十四号(平成二十六年三月七日発行)

○研究開発推進センター

・都市民俗学研究会(研究開発推進センター内)『都市民俗研究』第十九号(平成二十六年二月二十八日発行)

・研究開発推進センター渋谷学研究会『渋谷学ブックレット4 結節点としての渋谷―江戸から東京へ―』(平成二十六年二月二十八日発行)

・研究開発推進センター・古沢広祐責任編集『共存学2・災害後の人と文化 ゆらぐ世界』(平成二十六年二月二十八日発行)

・研究開発推進センター『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第八号(平成二十六年三月十日発行)

訃報

当機構客員教授山本信吉氏が、平成二十六年二月に逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

◆本学所蔵「御即位図」について

『機構ニュース』十四号十六頁に、内裏での天皇即位儀礼の様子を描いた「御即位図」(本学所蔵)の資料紹介を掲載した。本資料の制作年代は不詳だが、「狩野越前目文信画」との署名があることからこの人物を制作者とみて、生没年と改名の時期を手がかりに、明和八年(一七七二)に行われた後桃園天皇の即位礼を描いたものと推定した。

同号の発行後、所功氏(京都産業大学名誉教授)から、本資料で描かれている内裏構造の観点より御意見を御寄せいただいた。所氏によれば、本資料にみられるような承明門及び日華門・月華門をつなぐ回廊は存在せず、後に復古様式として寛政度の内裏造営(狩野文信没後)により建てられたものと合致するとする。そして、仮に本資料の制作者が狩野文信だとしても、明和八年の即位儀礼を実見してそのまま描いたものとはいえず、むしろ平安時代の「年中行事絵巻」などを手がかりに、本来あったはずの承明門などがあるべきものと想像して描いた可能性があるかもしれない、との御指摘であった。

所氏の御指摘を受けて、この「御即位図」が描かれた経緯・背景についての考証にはまだ課題が残ることが確認された。貴重な御教示をいただいた所氏に深く感謝申し上げます。(編集委員)

# 資料紹介 立木貝塚採集の土偶

國學院大學では、茨城県の霞ヶ浦から千葉県印旛沼周辺で大正期〜昭和初期に採集された縄文土偶八九点を新たに収蔵した。出土状況などは不明だが、採集の遺跡名と時期の書

かれたラベルが貼付されており資料的価値は高い。茨城県南部には椎塚貝塚、福田貝塚など百点以上の土偶を出土する縄文時代後期の遺跡が集中することが知られており、今回の



収蔵品にもこれらが数点含まれているが、利根町立木貝塚からの五六点が最多である。

立木貝塚は明治期より小発掘が繰り返され、千点とも言われる土偶の最多出遺跡として知られてきたが、

正式な発掘報告は明治大学が行った二回のみで、東京国立博物館二

二点、東京大学二一点、明治大学一七点をはじめ国内の大学、博物館、個人所蔵

のもの計約一二〇点が公表されている程度である。本学でも故野口義磨氏寄贈の二点を所蔵していた。

今回収蔵した五六点の大半は縄文時代後期中葉の東関東を中心に分布する「山形土偶」とみられ、その後

に盛行する「ミミズク土偶」も数点含まれる。これらがいずれも手のひらに収まるサイズで、頭部、胴部、腕部、脚部などバラバラの状態であることは、縄文土偶一般の特徴と共通する。

本格的な調査研究は今後の課題であるが、例えば頭部に赤彩を施した例、部位ごとに粘土塊をつなぎ合せて作られたものがすっぽりと抜けてしまった例などがある。

また、多数の脚部破片の中には足先に最大六本もの刻みを持つものがある一方で、手に指の表現は見られないことは、山形土偶に投影された身体イメージを探る上で興味深い。

(中村耕作)

